

平成23年度 工芸技術記録映画

# 献上博多織 ー小川規三郎のわざー

35ミリ・カラー・35分

企画：文化庁 製作：RKB映画社



<sup>けんじょうはかたおり</sup>「献上博多織」は、福岡市を中心とする地域に伝わる帯地用等絹織物の制作技術である。

江戸時代には黒田藩がこれを保護し、毎年、帯地等の織物を幕府に献上したことにより献上博多の名称が起った。伝統的な献上博多織の柄は「献上柄」と呼ばれ、仏具を象った「<sup>どっこ</sup>独鈷」「<sup>はなざら</sup>華皿」、そして「<sup>たていと</sup>縞」を経糸のみで表すものである。その制作技術は、経糸を密にし、<sup>よこいと</sup>緯糸を太くして、強く打ち込んで横畝を織り出すところに特色がある。重要無形文化財「献上博多織」保持者である小川規三郎は少年時代から父・<sup>おがわぜんざぶろう</sup>小川善三郎（重要無形文化財「献上博多織」保持者、昭和46年認定）に師事し、伝統的な献上博多織の制作技法を高度に体得した。日本伝統工芸展や日本伝統工芸染織展等に、独特の技法や意匠を活かした作品を発表し、高い評価を得ている。

この映画は、小川が作品「<sup>ごけんじょうはかたおりおび</sup>五献上博多織帯」を制作する全工程を忠実に記録したものである。



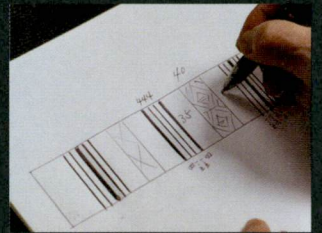
## 小川 規三郎（おがわ きさぶろう）

- 昭和11年 福岡県福岡市に生まれる
- 昭和61年 第23回日本伝統工芸染織展  
日本工芸会賞受賞 作品「<sup>かわ かんとうおび</sup>変り間道帯」
- 昭和62年 （公社）日本工芸会正会員
- 平成 6年 第31回日本伝統工芸染織展  
日本経済新聞社賞受賞 作品「<sup>しまけんじょううきおりおび</sup>縞献上浮織帯」
- 平成15年 黄綬褒章
- 同 年 重要無形文化財「献上博多織」保持者
- 平成20年 旭日小綬章



## 設計

献上博多織は、経糸のみで模様を表す。小川が献上博多織に使用する経糸の総数は6000本以上。柄の色や配置を決め、必要な経糸の本数と配列を計算する。今回は、地の色えんじを白、独鈷えんじを臙脂、華皿と縞を紺とすることにした。



## 糸調べ

染めあがった糸が切れていないか、汚れがないかなどを調べる。若い頃、京友禅の職人の元で染色について修業した経験をもつ小川は、染めについても厳しい目を持っている。



## 糸繰り

糸繰り機の「後光」と呼ばれる糸車ごこうに総糸を掛かせいとけ、一定の張りで糸巻き枠に糸を巻き取る。



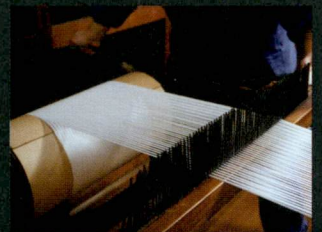
## 整経

必要な経糸の本数と長さをそろえる作業。小川は昔ながらの手作業で整経を行う。糸を2本ずつ交互に指で分け、製織せいしょくの際に緯糸の通り道となる「あぜ」をとる。



## 巻き物

整経した経糸を巻物台まきものだいの枠に巻き取ったあと、その先端を引き出して仮粗箆かりあらおさに通し、帯の幅を決める。糸の張りを一定に保ちながら、巻き軸に巻き取る。糸が互いにくい込まないように、糸と糸の間には、柿渋をひいた厚紙を挟む。



## 経糸割り

巻き軸に巻き取った経糸の最後の部分は、織り出す柄の配列に合わせて本数を数え、まとまり毎に束ねておく。



## 緯糸管巻き

博多織特有の太い緯糸にするため、糸巻き枠から引き出した糸を糸車いとぐるまにかけ、管に巻き取っていく。今回は20本あまりの糸を合わせた。





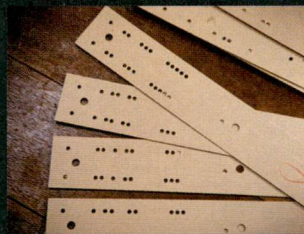
## なか 中あぜづくり

製織の際、経糸を上下させる綜統そうこうも自身の手でつくる。独鉗うきいとと華皿の模様を織り出す糸おもりを上下させるのが「中あぜ」。ナイロンの糸を輪にして2本をつなぎ、金属の錘おもりを吊す。今回は約280本の中あぜをつくった。



## もんがみ 紋紙づくり

中あぜを操るための「紋紙」。図案に従い、厚紙に専用の道具で穴をあける。20枚の紋紙を繋いで輪にし、ジャカード機にセットすると、踏みせを踏むたびに紋紙が1枚ずつ動いて、必要な中あぜが連動する。



## じ 地あぜづくり

「地あぜ」は、地と縞になる経糸を操るための綜統。祖父の代から使っている専用の道具でつくる。道具のまわりに糸を巻き付けた後、糸と棒をにかわで接着し、乾いた後、道具から外すと1枚の地あぜが完成する。地あぜは4枚つくる。



## はたじか 機仕掛け・中あぜ通し

機に取り付けた巻き軸から独鉗と華皿を織り出す経糸を引き出して、棒刀板ぼうとういたに吊した中あぜの綾目あやめに通す。夫婦ふたりで作業して半日を要する。



## 機仕掛け・地あぜ通し

地あぜには、地と縞になる経糸を通す。その数は5800本以上。夫婦ふたりで作業しても2日はかかる根気のいる作業。



## おさ 機仕掛け・箆通し

全ての経糸を箆の目に通していく。地の糸と、独鉗や華皿の模様になる糸は、ひとつの目に8本ずつ、また、縞になる糸は、立体感を出すため、ひとつの目に12本ずつ通す。



## いとほ 糸張り調整

これから機織りが始まる。絹糸は、湿度や気温の変化に敏感であるため、日々変化する糸の張り具合を、錘を使って調整し、常に一定に保つ。





## ため 試し織り

織り始めてしばらくの間は、柄の出方や銘の現れ方を見ながら、糸の張り具合や機の調子を確認する。帯を汚さないよう、表地を下に向けて織るため、柄や文字は鏡を使って確認する。



## せいしょく 製織

献上博多織には「三つ打ち・打ち返し」と呼ばれる伝統技法がある。緯糸を1段織り込む毎に、箆を3度打ち込み、最後に力一杯打ち込む。お太鼓や正面になる部分は固く、結び目となる部分はやわらかく…と、1本の帯でも場所によって微妙に力を加減しながら織り進める。



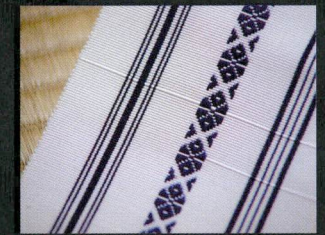
## ふくろおり 袋織

帯の端は袋織にする。経糸の密度が高いことを示し、同時に、職人の力量を示すことにも繋がる。



## かすみ 霞

横に入った2本の線を「霞」と呼ぶ。霞は帯にひきつりのない証であり、熟練した職人のみが成し得る技である。



## 完成

完成した「五献上博多織帯」。  
白地に臙脂の独鈷、紺の華皿が美しく鮮やかに織り出されている。



語り 生野文治

協力 福岡県立美術館 福岡市博物館 博多織デベロップメントカレッジ 博多織工業組合  
博多町家ふるさと館 学校法人 専門学校 九州ビジュアルアーツ  
福岡大学名誉教授 武野要子

スタッフ 製作：佐伯秀之 角光章子 安藤博 監督：豊田徳章 脚本：大仁田典子 豊田徳章

撮影：岩永勝敏 撮影助手：原幸司 吉川和克 中村純一 大仁田英貴

照明：多田俊一郎 照明助手：長澤功明 録音：仁田坂博 録音助手：中尾翔

ネガ編集：加納宗子 録音スタジオ：九州録音センター 選曲：松尾賢二

タイトル：津田輝王 南弘幸 現像：ヨコシネ D.I.A. 撮影機材：OFFICE FIFTY-ONE

照明機材：AND FILM STUDIO フィルム：コダック株式会社